

2015年度学院留学 研究成果概要

種 別：学院留学（短期）
所属・職・氏名：文学部・教授・木野光司
研究課題：バイエルン王国および周辺王家の都市文化の研究
留学期間：2015年3月25日～2015年9月5日
留学先：ドイツ連邦共和国 ミュンヘン大学 Japan Zentrum

研究成果概要

今回の学院留学にあたって、二つの大きな目的を設定していた。

主目的は、19世紀から20世紀初めまで続いたバイエルン王国の歴代国王の業績を中心に、合計6人の国王が首都ミュンヘンを中心に行った国内の文化事業の実際の進捗度、それらの業績が21世紀の現在どのように保存されているのかを実地に調査することであった。この調査は、後に挙げるバイエルン周辺国家の調査期間以外の4ヶ月間に継続的におこなった。最も詳細な調査をおこなったのは王国の首都ミュンヘンの王宮、夏宮、王たちの建造した劇場や美術館などの文化施設の数々であるが、その主たる施設を調査し終えることができた。これが今回の研究滞在の最大の収穫であると考えている。

次に重要なのは、バイエルン王国の幾つかの拠点となる都市などの調査であった。今回の調査では、7回に亘り、重要な都市や場所（インゴルシュタット、ランツフート、シュタルンベルク湖周辺、レーゲンスブルクとその周辺、ベルヒテスガーデン、プリーンとキーム湖、フュッセンと周辺）の調査をおこなうことができた。この地に滞在していないと訪問が難しい場所も多く、そこを訪問し、王家関連施設を実際に調査することができたことが大きな成果であった。他方、バイエルン州内においても、今回の滞在期間では時間が足りずに調査に行くことができなかった重要な都市や場所も多く残された。今後の課題としたい。

今回の留学で第二の目的としていたのは、バイエルンと同様の事情で王国への昇格を果たした隣国ヴェルテンベルク王国、ザクセン王国そして王国には到らなかったが大公国に格上げされたバーデン大公国の調査、並びにこれら新王国の成立によって厳しい競合関係に立たされることになった最大の国オーストリア帝国とそれに次ぐ国プロイセン王国の調査であった。結果的には、プロイセン王国関係の施設の調査を2回（ベルリンおよびポツダム）、オーストリア帝国の施設の調査を2回（ウィーンとその周辺およびインスブルック）、そしてヴェルテンベルク王国の首都（シュトゥットガルト及びその周辺）、ザクセン王国の2都市（ドレーズデンおよびライプツィヒ）、バーデン大公国の2都市（カールスルーエおよびバーデン）の調査を1回ずつおこなうことができた。調査対象国の首都が置かれた王宮を初めとするもっとも重要な施設と都市の状況

を実地に調べることができたことがこれらの調査旅行の大きな成果であった。ただ、バイエルン州の各都市の調査に比して、これらの隣国の詳細な調査を5ヶ月の滞在期間におこなうことは、時間的にも体力的にも無理があった。実際に訪問できなかった場所の情報に関しては、現地で入手した文献の記述に依拠するほかないと考えている。

第三の成果としては、ミュンヘン滞在中の5ヶ月にドイツ語圏の都市文化に直接触れることができたことが挙げられる。バイエルンの第二代国王ルートヴィヒ I 世が最も力点を置いたバイエルン王国の政策が、軍事国家としてではなく、文化国家として、ヨーロッパ諸国と肩を並べることであった。後に続く王達もこの政策を踏襲したことから、ミュンヘンは人口150万人規模の都市にしては立派な文化施設を備えている。王宮と隣接する国立オペラ劇場、王の広場一帯に広がるピナコテークやレンバツハ美術館、二つの博物館をはじめ、市の中心部全体を文化の集積地となっている。ドイツの都市文化が19世紀にどのような性格を持っていたのかを知る上で、これらの施設の近くにあった大学のゲストハウスに居住できたことも有意義であったといえる。仕事の後に盛装して劇場を訪れること、休日を庭園散策、美術館訪問などで過ごすことなど、19世紀の都市住民が味わっていたような都市文化を体験できたことは、目に見えにくい重要な成果であると考えている。

第四の成果は、二つの学会への参加である。一つは招聘先のミュンヘン大学日本センターのシュルツ教授の誘いでミュンヘン大学において8月に開催された「ドイツ語圏の日本学会」大会に参加し、ドイツ語圏の日本学者たちの研究発表やシンポジウムを聞くことができたことであり、もう一つは、筆者が30年来所属しているドイツの「E. T. A. ホフマン協会」が2015年度総会・研究発表会をドレーズデンで開催した折りにドレーズデンを訪れ、総会・研究発表会に参加し、議論に加わることができたことであった。前者においては、日本語を話すドイツ学者である筆者とは対照的な立場で日本文化の研究をしている研究者たちの発表に触れることができた。後者においては、現在のドイツでのホフマン研究の状況を知ることができた。

最後の成果としては、ここまで報告してきた各地での現地調査の際に、日本では入手できないローカルな専門誌を含む多くの文献・資料を収集できたことを挙げておきたい。歴史、社会文化史関係の文献を50冊余り、美術、芸術、演劇関係の資料を20冊余り入手し、日本に持ち帰った。ミュンヘン滞在中にはそれらの内のごく一部にしか目を通す時間が得られなかったため、それらを読み進め、論文等にまとめるのが今後の大きな課題であると考えている。以上で今回のドイツ留学の成果報告としたい。

研究成果概要のデータは、gakunai@kwansei.ac.jpまで提出してください。